



第271号

公益社団法人
医学振興
銀杏会

(編集同人)

荻原俊男 米田正太郎
杉本 央 富田尚裕
上田啓次 朝野和典
木村 正 森井英一
日比野浩 久保盾貴
馬場幸子

ケーション可能なサイバー空間が極めて大きな役割を果たした一方で、AI技術が駆使されるようになってきた昨今、現実社会で暮らす私たちの人間の尊厳にまで浸食し、脳は自ら考えることを停止し、感受性が麻痺してしまう事態、「脳の腐敗」を招いていると危惧している。」と、上村松園作「詠哥之図」や詩人の茨木のり子さんの「自分の感受性くらい」という詩に込められた「感受性」を磨くことの大切さを説き、「ここから始まる新しい一歩に、大きな期待をしています。」と述べられた。

また、医学部医学科卒業式が同日午後3時より行われ、将来を嘱望される124名の新医学士が誕生した。熊ノ郷淳医学系研究科・科長より一人一人に学位記が授与され、「皆さんは、阪大に入学したときに、3つの財産を手に入れています。今ここにいる仲間、指導をうけた素晴らしい教授の先生方、そして阪大医学部の関連病院、研究所を含めたネットワークです。今日は卒業であると同時に、この3つの財産をキャリアに活かし始めるスタートでもあります。プロフェッショナルとしてのオンリーワンを意識しながら、これからの医学・医療を切り開いていってください。皆さんの将来に期待しています。」と激励された。

野々村祝夫医学部附属病院長は、「卒業後は、臨床の道に進む人も必ず将来一度は研究に携わってほしいと思います。研究に携わることは将来必ず役に立つはずで

令和6年度大阪大学卒業式が大阪城ホールで3月25日に行われた。

西尾章治郎総長はその式辞の中で、「未曾有のCOVID-19のパンデミックのなかで人が直接対面することなくコミュニ

また、機会があれば海外留学もしてほしいです。将来、海外で活躍できる人が今年の卒業生の中から出てくることを期待しています。そして、趣味を持ち、メリハリのある充実した医師生活を送ってください。」と激励された。

最後に吉川秀樹医学振興銀杏会(学友会)理事長が、「橋本左内が浮浪者を治療していた時の言葉です。『適塾で学んだことを実際の患者に試してみたかったです。学んだことが、いま生きている人に役立たなければ、そんな学問は死学であって実学ではありません。緒方先生の学問は、実学であることが、よくわかりました。』この適塾の精神を忘れることなく立派な医師になって欲しい。」と、激励の言葉を述べられた。

令和6年度「楠本賞」は、一色咲樹君にその栄誉が送られた。令和6年度優秀者として、博士課程の杉原礼一君と小嶋崇史君、学部学生の安部政俊君と高橋勇伍君の4名に「山村賞」が授与された。また、MD研究者育成プログラム修了者3名も認定を受けた。

124名医学士誕生

第96回 卒業式



定期総会ご案内

開催日 令和7年5月31日(土)
開催場所 大阪大学医学部銀杏会館 3階
級会・支部交流会 正午～午後1時30分
総 会 午後1時30分～午後4時15分
特別講演 「なならない」から「なおる」へ
－難病の病態解明と核酸医薬による分子標的治療－
国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター
病院長 戸田達史先生
開催方式 現地参加をお待ちしております。
オンライン視聴も可能です(4面参照)
懇親会の開催はございません。

医学系研究科長就任のご挨拶



石井 優 (平10)

この度、令和7年4月1日より医学系研究科長・医学部長を拝命いたしました石井優と申します。適塾をルーツとする長い歴史の中で、数多くの輝かしい実績で世界の医学・医療を牽引し続けてきた本研究科の科長として奉職する機会を頂き、身の引き締まる思いを日々感じております。国内屈指の医学部としての伝統と誇りを継承するとともに、現状に甘んじることなく時流の変化に先んじて大胆に挑戦をし続けることでさらに研究科を発展させ、次の時代にバトンを渡すことが私の使命と考えております。

研究科長として本研究科の発展のために様々な課題に取り組んでいく所存であります。中でもリサーチマインドをもった医師・医学者の育成のための教育改革は最重点課題と考えます。初期臨床研修の義務化や専門医制度の複雑化、その他の社会情勢の変化により、研究志向の医師が減少傾向にあることが全国的にも大きな問題となっています。しかしながら、今日でも多くの病気がその原因が不明で根本的な治療法がなく、次世代の医療を切り拓くために臨床・基礎を問わず医学研究者の養成は喫緊の課題であり、大阪大学医学部にはそういった次世代の医学・医療を切り拓く人材を育成する義務があります。その一方で、昨今は、医学教育の国際認証への対応や、臨床能力試験 (OSCE) の公的試験化などの「外圧」によってカリキュラム変更がなされてきていますが、これは本来あるべき姿ではないように感じます。大阪大学医学部と

してどのような医師・医学者を育成したいのか、そのポリシーに基づいた教育の実現のためにカリキュラムを主体的に決定すべきです。教育はその本当の成果が表れるのに時間がかか

りますので、研究科内で十分な議論を重ねつつ、全国で始めて基礎医学配属実習を導入した大阪大学医学部ならではの斬新な施策に挑戦できればと考えております。その他、研究・運営面では、医学系研究科の更なる国際化のためにコロナ禍で途絶え気味であった国際交流を積極的に復活させていきたいと考えます。また、競争的資金獲得に向けて国内外での研究動向の把握や、教員選考の人材発掘のために、研究教育調査室の機能を拡充するほか、本学の特徴である共同研究実習センターを発展させ、オミックスやイメージングなど最先端の研究技術を共有資産としてコアファシリティー化し、研究科全体の研究力強化につなげたいと考えております。

これらすべての研究科運営には、学友会の先生方のご尽力なくしては成り立ちません。どうか今後も引き続きご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

寄 附 御 礼

令和6年11月28日から令和7年4月7日までに、20,454,000円のご寄附を頂き、誠に有難うございました。公益社団法人への移行に伴い、平成23年4月1日より当会へのご寄附は個人・法人とも税金控除の対象となっております。また、令和3年7月14日より当会は、寄附金に対してより有利な控除である税額控除制度が選択できる団体として認定されました。詳細に関しては、事務局までお問い合わせください。

三六会より、250,000円をご寄附いただきました。

岸本忠三先生(阪大医 昭39)より、20,000,000円をご寄附いただきました。

吉川 秀樹 先生(阪大医 昭54)より、200,000円をご寄附いただきました。

大阪大学同窓会連合会より、4,000円をご寄附いただきました。

当会へのご寄附について

当会は平成23年4月に公益社団法人となりましたが、それ以来、会員の先生方より当会の公益事業に対する多額のご寄附をいただいております。ご支援ありがとうございます。

当会へいただいたご寄附は、基本的には当会の公益事業全般(下記の事業すべて)に使用させていただきますが、下記より支援する事業をご指定いただくこともできます。

(1) 研究助成奨学事業：医学部学生・院生や医学研究者に対する奨学金支給・研究助成を行います。

(2) 知識普及啓発事業：新入生対象の医学史研修や一般市民対象のシンポジウム、学術雑誌(学友会会誌)の発行を行います。

(3) ネットワーク強化事業：医療関係者対象のシンポジウムや、メールマガジンにて臨床・教育情報の発信と交流を行います。

また当会へご寄附いただいた方に対しては、あらかじめご意向を伺った上でお名前や寄附金額を学友会 ニュース等に掲載させていただくとともに、当会規定に基づいて理事長よりお礼状や感謝状をお送りさせていただきます。また併せてお送りする領収書は税金の控除手続きに必要ですので、お手元に保管いただきますようお願い申し上げます。

ご寄附の申し込みやお問い合わせは事務局 [電話06 6879-3501(平日8時30分～17時15分)、またはoffice@ichou.med.osaka-u.ac.jp] までお願い申し上げます。

＜受賞＞ 日本学術振興会賞 井上大地(平17・京大医)

新入生諸君、阪大医学部の源流を味わおう！

大阪大学医学部の新入生が、母校の歴史を知り、母校に対する誇りや同窓の仲間意識が高まることを目指し、学友会では体験型の医学部歴史探訪を平成29年より行っています。この事業は、会員の皆様のご寄附や医学系研究科教務室、適塾記念センター、各学年の在校生有志の方々のご協力で、毎年入学式直後に、医学部の源流である「適塾」(大阪市中央区北浜3-3-8)の見学会と医学史の講義として行われています。本年は4月5日(土)に開催されました。数年間のCOVID-19感染症蔓延の影響を受けた時期を乗り越え、令和4年より現地開催の形に戻って以降は従来通りの開催で実施しています。新入生同士、また上級生や教授陣とのコミュニケーションがさらに進んでいるように感じました。まず始めに、エル・おおさかで行われた医学史講義では、ともに学友会理事である渡邊幹夫教授(平5)・馬場幸子先生(平16)から、「母校の歴史を学ぶことで、誇りを持ち、同窓の仲間意識を高め、充実した大学生活を送ることにつながる」とのお話がありました。適塾からの歴史が紹介され、大阪大学医学部は多くの先輩方の貢献があって今日があることを学び、そしてその伝統を未来に引き継ぐ使命を帯びていることを強く感じたように見受けられました。

適塾では、島田昌一教授(昭61)・理事の森井英一教授(平4)から、緒方洪庵先生や適塾の歴史の紹介がありました。適塾当時の塾生は、閉鎖的な時代に新しいことへチャレンジし、競い合って成長したといいます。新入生の皆さんもこれからは友人とともに好きなことと思う存分打ち込める大学生生活が待っているというお話がありました。皆さん真剣に耳を傾けており、こちらから彼らの未来への希望を信じずにはいられませんでした。



馬場先生による医学史講義



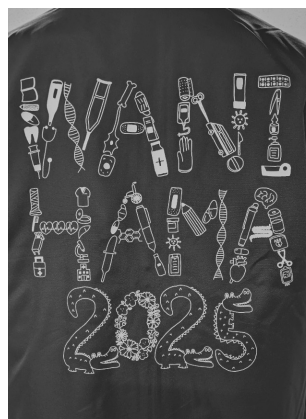
島田教授による新入生への説明(学部4回生木村知世さん撮影)

受験生という時期を乗り越えた新入生の皆さんは、その苦労を人生での貴重な期間とし、皆が一体となりこれからの医学部を築き上げていただきたいと思います。歴史探訪は、後輩が大阪大学医学部への愛着や誇りを育むきっかけになるものと信じております。ご協力いただきました皆様に改めて深く感謝申し上げます。

山本琢磨(平18)



森井教授による新入生への説明(学部4回生木村知世さん撮影)



2025年度版
わにはまスタッフブルゾン

(学生製作者コメント)

見ているだけで楽しめるような可愛いデザインにしました！

(編集部注釈)

たくさんの医療器具をモチーフにしたデザインです。当会HPで拡大してご覧いただけます。

第六回岸本基金奨学生同窓会総会・発表会開催報告



令和7年3月23日、岸本基金奨学生同窓会の第六回総会及び発表会が最先端医療融合イノベーションセンター棟において開催されました。本同窓会は、「大阪大学岸本国際交流奨学基金」及び「岸本基金」による奨学助成金を受給した者から構成されます。会員数は前回より60名増の394名であり、うち45名の会員が出席しました。総会・発表会は名誉会員の渡部健二先生(平6)による司会のもと進められました。名誉会長である岸本忠三先生(昭39)は、長年の研究の積み重ねにより発見したIL-6が、日本初の抗体医薬品開発に結実し、近年ではCAR-T細胞療法に伴う副作用治療に活用されていることに言及された後、「本奨学金によって真髄を突いたような研究に取り組んでいただくことを期待します」とご挨拶されました。続いて、熊ノ郷淳医学系研究科長(平3)・華山力成会長(平11)によるご挨拶、医学科教育センター准教授の河盛段先生(平8)による海外留学・MD研究者育成プログラム支援を含む事業報告が行われました。続いて、現役奨学生2名による発表会が行われました。終了後は、銀杏会館内の「レストランミネルバ」にて意見交換会が催され、名誉会員の森井英一先生によるご発声による乾杯で開宴。名誉会長・名誉会員と奨学生、さらに奨学生同士での懇親を深めました。

馬場幸子(平16)

総会オンライン視聴のための事前登録方法



https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_z6Kxr3RVS6ew9cZ6Us9Qhg

2025年度医学振興銀杏会総会
2025年5月31日 01:30 PM
大阪、札幌、東京



ウェビナー登録

名 学友会
姓 花子
メールアドレス office@ichou.med~

卒業年または学年

平成5

出身大学

大阪大学

登録

すべて入力したら、
登録ボタンを押す

QRコードをカメラで読み込んで頂くか、ネット環境でURLを入力頂くと、この登録画面が出て来ます

配信に使用するZoomは国際表記で日本語で入力の場合は、姓名が逆に表示されますので、「名」に苗字「姓」に名前を入力して下さい

ウェビナー登録が完了しました

2025年度医学振興銀杏会総会
2025年5月31日 01:30 PM
大阪、札幌、東京

参加登録はこれで完了です。
登録したメールアドレスに登録確認メールと、開催日前日にリマインダーメールが届きます

提

言

いのち輝く未来社会と2025年問題

この原稿が皆様のお手元に届くころには、大阪・関西万博に出かけられた方もいらっしゃると思う。万博というとExpo '70を思い出すが、その時のテーマは「人類の進歩と調和」で、調和は別として進歩はあの時に感じたものの遥か上を行っている。今回の万博は、「いのち輝く未来社会のデザイン」がテーマである。響きの良い言葉で、医学・医療に携わる者として「いのち」という言葉だけでイメージが膨らんでしまう（何故ひらがなのかは別として）。万博の公式サイトを見ると、各界のトップランナー8人が自ら創り上げるテーマ事業が示されている。「いのちを知る」「いのちを育む」「いのちを守る」「いのちをつむぐ」「いのちを拓げる」「いのちを高める」「いのちを磨く」「いのちを響き合わせる」の8つで、生物学系の「いのちを知る」と科学技術の融合による「いのちを拓げる」が私たちの分野に近い気がする。AI、IoT、ロボットの話はその中心であると思われるし、AIホスピタルという現在進行形のテーマも万博では更に進化する未来を提示してくれると期待が膨らむ。

一方、万博はお祭りという側面があるせいか、きらびやかな輝きが強調され、我々が現実には直面している

「生きるいのち」という観点での未来社会のデザインはどう描かれるのか見えにくい。団塊の世代のすべてが75歳以上になる年を取り上げて2025年問題という言葉があるが、まさにその年に入り込んだ時に開催される万博として、日本が世界に発信すべき情報は多いであろう。テーマ事業のひとつである「いのちを守る」の説明に「危機に瀕し、人類は『分断』を経験する」「多様ないのちが、それぞれに、護られてゆく未来を描く」とあるのでここで語られるのかもしれない。様々な場面で分断を作り出して危機を演出するのが常套手段の世界で、医療人として分断に陥らない信条を自らに問い直すことも意味があると考ええる。分断は緒方洪庵先生が説く貴賤貧富の話だけではない。2025年問題対策の一つに生涯現役的な話もあるが、定年制やエイジズム（年齢差別）への対処、限りあるいのちと尊厳を分断からどう護るのかは直近のかつ永遠の大きなテーマである。医療費削減や高額療養費制度をパイの分配で語るだけなら分断を強化するだけで、新しい科学と今とは違う心のあり方が求められている。いぶし銀的な輝きも含めて、いのち輝く未来社会をそれぞれがデザインする万博を楽しみにしたい。

楽木宏実 (昭59)



…その 172

早く帰りたくなる病院？

いよいよ今年5月に統合診療棟の供用が始まり、平成25年、金倉病院長（当時）のご下命以来関わってきた者として感無量です。

大学病院は文科省の管轄で、そもそも北摂に留まるべきか、に始まり、臨床研究のあり方、文科省が定める病院面積の協議、再開発を改修で出来ないのか、資金計画、少子高齢化の中での医療需要、など様々な論点で院内・学内・文科省と協議したことは懐かしい思い出です。海外の主要大学病院(MGH、Oxford、Seoul、Taiwan等)と阪大病院（計画当時）と比べ、阪大の入院患者数は数倍あるのに手術数は1/5、分娩数は1/10、外来患者数は1/2-1/5などを示し「日本の大学病院はしょぼい。エビデンス出しにくい。それでええんか?」と迫り面積等の理解を得ました。欧州の古い大学では100年前の建物で超近代的医療が行われ、羨ましかったので再開発に関わる職員達と一緒にドイツでリノベーション工事現場を見学し、日本の建物は天井が低く、耐震のために梁が多く工事や間取りの制約が大きい、等彼我の構造差が分かり、改修による再開発は困難、と結論付けました。大学からは、自己資金を貯めたくても「貯めるカネがあるなら運営費交付金が削られる」と言われましたが、交渉で可能な限り多くの準備金を作り、本来は病棟と一体計画をすべきところ統合診療棟だけを先行させ

る、と言う条件でようやく対文科省協議が決着しました。

契約成立の後、コロナ禍、ウクライナ戦争と想定外事変が続き、地中ごみが沢山出て処理費が嵩み、関係各位が可能な限りの価格交渉をしましたが、「公共事業では不当な値切り禁止」という規則があり、当初より100億円以上総経費が増えました。大学学舎は国の予算で建つのですが、病院は建設費の1割しか国のお金は出ず、700億を超える事業費のうち施設整備補助金と運営費交付金を合わせた58億以外は将来返す借金です。ここに緑を、患者アメニティー向上を、と勧められましたが私は会議で「急性期病院なんだから、早く帰りたくなる病院にしよう。」と迷言(?)を吐きなるべく節約しました。何とか建屋は立ちましたが内部に入れたい器械はまだ全部を買ってはいません。学友会の皆さまにはぜひ、引き続き阪大病院再開発基金<https://www.miraikikin.osaka-u.ac.jp/project/hosp-med>へのご協力をお願いいたします。

今回は、地方独立行政法人りんくう総合医療センター病院長の松岡哲也先生(昭60)にお願いしました。

地方独立行政法人堺市立病院機構 理事長
木村 正 (昭60)

病 院 ・ 施 設 紹 介

大阪けいさつ病院

大阪けいさつ病院新病院開院を迎えて

このたび、令和7年1月1日に、4代目の建物となる大阪けいさつ病院の新病院をオープンさせていただきました。本院は大阪帝国大学医学部の関連病院として昭和12年に、名称が示す如く、大阪府警の一組織としてスタートした、87年の歴史を持つ総合病院であります。戦中戦後の混乱期や高度経済成長期またコロナパンデミックなどの困難をのりこえ、地域医療の中心的担い手として、最先端医療を実践し、手術件数・救急受け入れ件数ともに大阪市内屈指の急性期高度医療総合病院へと発展してまいりました。しかし、建物が老朽化し、種々のハード面も限界に達し、地域への急性期高度医療という重要な役割をこれ以上担うことが困難になってまいりました。そこで、隣接する大阪大学の関連病院であるNTT西日本病院との統合とともに、長年お世話になった大阪府警察協会から独立して社会医療法人警和会を立ち上げ、これまでの北山町から旧NTT西日本病院の地に移って、4度目の新病院すなわち、時代に合った高機能スマートホスピタルの開院に至ったわけであります。

新病院の理念は、現在開催中の万博のレガシーとして「いのち輝く未来に貢献する病院」であり、そのいのち輝くスマート病院において、

- 誰のいのちもとのこさない しなやかな病院
- 最先端技術で医療を革新する病院
- 地域にグローバルに連携する病院
- 次世代の医療人材を育てる病院

の、4つの基本方針を実践してまいり所存でございます。

新病院の概要は、大阪府下で第一号機となる最新の単孔式ダビンチSPをふくめて3台の手術用ロボット、3室のハイブリッド手術などの最先端医療を最大限に可能にする医療器や、がんはもとより認知症にも対応するPET-CTなどの最先端診断機器を導入しております。一方、インターネット機能は5G完備のもとに、職員全員に電子カルテを搭載したiPhoneを配布し、医療や業務の効率化や合理化をはかるとともに働き方改革を達成する、職員にもやさしい病院を目指しております。また、患者さんに対しては、最新の病室による快適な入院環境を提供し、在院時間を短縮するスマート外来や、診療内容を自身のスマートフォンで確認できる患者サービスの提供など枚挙にいとまのないスマート化を実現します。さらに、2年後には水に浮かぶガラス張りのエントランス棟が完成します。その中にはホテルのラウンジのような地域のコミュニティカフェを設置し、4階屋上は職員食堂とつながるオープンカフェとして、職員の憩いの場とする計画です。私も令和9年のグランドオープンがたいへん待ち遠しいです。

ところで、医療を取り巻く環境は、コロナを乗り越えた現在、コロナ前より一層厳しく、病院経営は過酷な状況にあります。特に本院のような650床のベッド数で最高水準の最先端医療を提供する社会医療法人すなわち独立した民間病院は日本中に見当たりません。しかし、本院がこれまで地域に貢献してきた役割は多大であり、今後もこの使命を全うしていかなければなりません。この使命感のもとに、マーケティング強化と病病・病診連携によるアライアンス強化を図り、サステナブルかつスマートな経営と運営を図ってまいります。さらに法人名も警和会から大阪国際メディカル&サイエンスセンターに変更し、病院名もけいさつをひらがなで表記し、さらにロゴもOIMの各文字の上に小さな○をつけて、人のやさしさ・ふれあい・たすけあいを表現させていただいております。このように建物や医療機器、法人名・病院表記やロゴも一新した大阪けいさつ病院ですが、本院の最大の武器は、なんと申しまでも、きわめて高いモチベーションと奉仕の精神を持ち、全身全霊でいのちを守る1600人の職員であります。今までこの職員一丸のパワーでコロナ等のいろいろな困難を克服し、地域医療に貢献し大阪けいさつ病院のブランドを築いてまいりました。「人は財産」、これはこれまで医療人として40年以上歩んできた私の信念であります。なにとぞ87年間の伝統ある警察病院のDNAを受け継いできた、全職員に、引き続き暖かいご支援をいただけますように、そして本院がサステナブルなスマートホスピタルとして大阪けいさつ病院のブランドを一層高めつつ、これまで以上に高度急性期の地域医療に貢献させていただくためにも、学友会の先生方に置かれましては今後ともご理解とご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

大阪国際メディカル&サイエンスセンター 理事長
大阪けいさつ病院 院長
澤 芳樹(昭55)



トピックス

iPS細胞由来角膜上皮を用いた再生医療

眼球の最表面を構成する角膜は上皮、ボーマン層、実質、デスメ膜、内皮の5層から構成されている。角膜上皮幹細胞は角膜輪部の基底部に存在し、上皮の恒常性維持に重要である。角膜上皮幹細胞が消失すると角膜上皮幹細胞疲弊症という状態になり、角膜が混濁して失明状態となることから、幹細胞移植が必要となる。従来行われてきた他家角膜輪部移植は術後免疫拒絶反応や感染性角膜炎のリスクがあり、アイバンクに献眼された角膜を用いることからドナー不足も深刻である。これに対し、再生医療技術を用いた自家培養角膜上皮細胞シートや口腔粘膜上皮細胞シートの移植が開発され一定の成果を上げているが、前者は主に片眼性疾患患者にしか用いることができない事や後者は制御が難しい角膜新生血管などの問題点がある。

そこで、我々はiPS細胞から角膜上皮幹細胞を誘導する技術を開発しており、iPS細胞由来角膜上皮細胞シート (iPS cell-derived corneal epithelial cell sheet : iCEPS) を用いた臨床研究を4例の患者を対象として行った。(Lancet 2024;404;1929-1939) 1年間の安全性および有効性を評価する観察期間と、主に安全性を評価する追加1年間の追跡調査期間を通じて経過観察を行った。最初の2例は免疫抑制剤を内服したうえで経過観察を実施し、次の2例は免疫抑制剤の内服なしで経過観察を行った。

主要評価項目である有害事象に関しては、腫瘍形成や臨床的拒絶反応を含む重篤な有害事象は、2年間の観察期間および追跡調査期間を通じて発生しなかった。その他の有害事象についても、臨床的に重要なものはなく、すべて後遺症なく対処可能であった。

副次評価項目においては、術後1年時点で全症例に角膜上皮幹細胞疲弊症の病期の改善および角膜混濁の減少が認められた。矯正視力は術前と術後1年を比較すると、症例1では0.03から0.3に、症例2では0.01から0.15に、症例3では0.15から0.7に、症例4では0.02から0.04に改善した。角膜上皮欠損、自覚症状、QOLアンケートスコア、角膜新生血管については、ほとんどの症例で改善または不変であった。これらの結果から、本治療が安全性および有効性を有することが示唆された。

今後は治験を行うことで、本治療法の有効性及び安全性をさらに検討して、iPS細胞由来角膜上皮細胞シートの再生医療製品としての承認を目指す予定である。

西田幸二 (昭63)

